

## ドゥンス・スコトゥス『「命題集」註解（オルディナティオ）』第2巻第3区分第1部第7問題 試訳

本間 裕之／石田 隆太

### 凡例

- ・訳出にあたっては次のヴァチカン版を底本とした。

*Doctoris subtilis et Mariani, Ioannis Duns Scoti, Ordinis Fratrum Minorum, opera omnia, iussu et auctoritate RMI P. Constantini Koser, totius Ordinis Fratrum Minorum Ministri Generalis, studio et cura Commissionis Scotisticae, ad fidem codicum edita. Vol. 7: Ordinatio, Liber secundus, a distinctione prima ad tertiam. Civitas Vaticana: Typis Polyglottis Vaticanis, 1973.*

- ・本稿が扱う第7問題の翻訳を収録する近代語訳として、次のものを参照した。

SONDAG, G. (tr). *Le principe d'individuation*. Paris: Librairie philosophique J. Vrin, 1992.

- ・また次のものは、第7問題を含む『オルディナティオ』第2巻第3区分第1部全体に対する詳細な註解を収録しており、非常に有益である。

BOULNOIS, O. *Lire le principe d'individuation de Duns Scot*. Paris: Librairie philosophique J. Vrin, 2014. [Boulnois と略記]

- ・訳者それぞれのことを本稿では次のように略記を用いて表記する。

本間→H 石田→I

- ・註などにおいても特に明示する必要がある場合に限り（H）のように担当者を明示する。
- ・訳者自身による訳文中の〔 〕は訳者による補いであり、〔 〕は原語の引用である。
- ・指示語および指示語を含む語句に関しては、必要に応じて指示内容を明確化して訳出するよう心掛けた。
- ・上記ヴァチカン版の註にて《textus interpolatus》や《adnotatio interpolata》として取りあげられている箇所については、前者は「挿入」と、後者は「註記」と略記し、訳出した上で同じように註に組み込んだ。
- ・註にて使用した文献の略記一覧は次の通りである。なお慣例に従い、アリストテレスの著作にはベッカー版の頁数と行数を付した。また、既存の日本語訳を引用する際には仮名遣いを現代のものに置き換えるなどの処理を施した。

## HGOO

*Henrici de Gandavo, opera omnia.* Leuven: Leuven University Press, 1979–.

## HGQ

*Quodlibeta Magistri Henrici Goethals a Gandavo, Doctoris solemnitis, Socii Sorbonici et Archidiaconi Tornacensis cum duplici tabella.* Paris: Ab Iodoco Badio Ascensio, 1518.

## Köhler

KÖHLER, Th. W. *Der Begriff der Einheit und ihr ontologisches Prinzip nach dem Sentenzenkommentar des Jakob von Metz O.P.* Roma: Libreria Herder, 1971.

## Mandonnet

*Scriptum super libros Sententiarum Magistri Petri Lombardi Episcopi Parisiensis.* Editio nova. Tom. II. Paris: P. Lethielleux, 1929.

## Moos

MOOS, M. F. (ed). *Scriptum super Sententiis Magistri Petri Lombardi.* Tom. III. Paris: P. Lethielleux, 1956.

## Pera

PERA, C. (ed). *Liber de Veritate Catholicae Fidei contra errores Infidelium.* Vol. II. Torino - Roma: Marietti, 1961.

## Van Riet

VAN RIET, S. (ed). *Avicenna Latinus. Liber de philosophia prima sive scientia divina.* Louvain - Leiden: E. Peeters - E. J. Brill, 1977–83.

## VAT

*Ioannis Duns Scoti, opera omnia, studio et cura Commissionis Scotisticae, ad fidem codicum edita.* Civitas Vaticana: Typis Polyglottis Vaticanis, 1950–.

## アリストテレス全集旧

出隆（監修）、『アリストテレス全集』、岩波書店、1968–73年。

## アリストテレス全集新

内山勝利、神崎繁、中畑正志（監修）、『アリストテレス全集』、岩波書店、2013年～。

## 神学大全

高田三郎ほか（訳）、『神学大全』、創文社、1960–2012年。

## 中世思想原典集成 I

上智大学中世思想研究所（監修）、『中世思想原典集成』、平凡社、1992–2002年。

## はじめに

ヨハネス・ドゥンス・スコトゥスの『「命題集」註解』は通称『オルディナティオ』（*Ordinatio*）として知られるものであり、ここではその第2巻第3区分第1部第7問題を訳出した。この第2巻第3区分第1部は「個体化の原理」（*principium individuationis*）に関する有名な箇所として知られているが、その最後の問題である第7問題のみは日本語訳が出版されていない状況が続いていた<sup>1</sup>。第7問題では諸天使が同一の種において存在することができるのか否かが問題とされており、個体化の原理を問う問題意識が諸天使の区別というスコラ的な題材と密接に結びついていることをここでは見ることができる（cf. Köhler, pp. 217–360）。スコトゥス自身の見解としては、諸天使は同一の種において存在することができるという肯定的な立場が表明されていくことになる。

この第7問題の構成は以下の通りである。第一に、第212段落において問題が提出される。第二に、第213段落から第223段落までにおいて、諸天使が同一の種において存在することはできないという見解の諸論拠が示される。第213段落ではアリストテレスが、第214段落ではアヴィセンナが権威として用いられる議論が紹介されている。それに対して第215段落以下では、スコトゥスが明言するように、「理性による」議論が展開されている。ただしその議論の補強として、たびたびアリストテレスが参照されている（第216–17段落、第222–23段落）。スコトゥスにとっては異論に相当する見解が大文字の哲学者アリストテレスとこのようにしばしば密接に結びついていることについて、スコトゥスは、後述するように、鋭いコメントを残している（例えば第239段落）。そのコメントの伏線としても、アリストテレスやアヴィセンナへの参照を捉えることができる。

第三に、スコトゥスの側に立つ権威としてダマスケヌスが手短に参照される。そして第四に、第225段落から第226段落においては、諸天使の区別に関する問題に対する他人の見解として、個体化の原理を質料や量であるとした論者の見解が紹介されている。典型的にはトマス・アクィナスの見解が念頭に置かれている。さらに、第225段落でスコトゥスが、自分にとって論敵であるこれらの人々の見解が神の全能性に抵触するものでもあることに言及していることから、1277年のエティエン

<sup>1</sup> 第1問題から第6問題の日本語訳としては渋谷克美による訳（中世思想原典集成 1, 18, pp. 217–316）が既出版されている。

ヌ・タンピエによる禁令の残響を聞くことができる（cf. Boulnois, p. 168）。

第五に、スコトゥスは、「同じ種において複数の天使があることは端的に可能である」という見解を表明する。そしてこのことの理由説明を含む自らの立場表明が、第227段落から第237段落まで続く。さらに細分化するなら、まず、第227段落から第230段落までにおいてスコトゥスは、自分の立場に対する理由説明を行う。次に、第230段落で人間の魂と身体との関わりについて言及したことを受けて、第231段落では、フォンテーヌのゴドフロワに帰される見解を念頭に置いた想定反論が示される。これに対する応答が第233段落まで続く。さらに、第234段落からは、人間の魂の多数性との関連が別の観点から深められる。第235段落ではアウグスティヌスが権威として引用され、第236段落までこの論点が続く。最後に、第237段落では、自らの立場の総括が述べられる。この箇所は、諸天使の区別に関するスコトゥスの立場が端的に示されている箇所として、最も参照に値する箇所の一つである。

第六に、第238段落から第254段落において、スコトゥスは異論に対する応答を行っていく。この詳細を説明することは以下の訳文によって代えることにしたいが、先ほど述べたスコトゥスによる鋭いコメントについてのみここで言及しておくことにしよう。第239段落においてスコトゥスは、各天使には固有の種があるという（スコトゥスから見れば誤った）結論を導くことになる或る大前提に対して不賛同を示す。その大前提とは「質料を持たない何性はすべて形相的に必然的なものである」という命題であり、この大前提を踏まえて誤った結論を導き出すのがアリストテレス的な立場だとスコトゥスは理解している。ブルノワが註解しているように、この命題は、神ではない被造物である天使に対して存在の上での必然性を認めるものである。すなわち、この命題を認めてしまうと、創造の理拠が依拠している有限な存在者の偶然性という観念が危険に晒されることになる。その意味で、この大前提自体はすべての神学者が拒否するはずのものとスコトゥスは考えている（cf. Boulnois, p. 174）。その上で、スコトゥスのように最初からこの大前提を拒否するだけであることの方が、大前提に関しては不賛同であるはずなのに誤った結論に関してはアリストテレスと同じ立場に陥ってしまうこと（例えばトマスのような立場）よりも、神学者にとっては「より合理的」だとスコトゥスは明言する。以上を前提するなら、スコトゥスはここで、「より合理的ではない」神学者の立場はアリストテレス的な立場よりもさらに認めがたいものであることを主張している。すなわちこの主張は、異教の哲学者に対する異議を唱えること以上に、神学者としての立場そのものに矛

盾が見られることの方がより責められるべき事柄であることを含意する。スコトゥスに言わせれば、「より合理的ではない」神学者は、権威としているアリストテレスの理解についてさえ不確かであることになるだろう。こうしたスコトゥスの言明からは、ブルノワも言うようにやはり 1277 年の禁令の残響を聞き取ることが容易である（cf. Boulnois, p. 174）。ただしそれだけではなくて、「神学者」であっても「哲学者」（この場合はアリストテレス）による議論構造を正確に把握することが（少なくともスコトゥスにとっては）重要視されていたという点を読み取ることも可能である。このようにしてこの第7問題は、諸天使の区別に限らず、神学と哲学（あるいは信と知）の関わりというより問題の規模が大きくまた興味深い話題に関しても考察を促す可能性を秘めている。スコラ的なテキストを単にミクロに読解するだけではなくてマクロにも読解することができる一つの実例として、この試訳を位置づけることにしたい。

なお本稿は、下訳を H が作成した上で訳者二人が検討を加えて作成したものである。

そして末筆ながら、鬼界彰夫先生の退職を記念する号に、この未邦訳テキストの翻訳を掲載することができたことが、筆者がこれまで鬼界先生から受けてきた御恩に対する少しばかりの報いとなることを願っている（I）。

## 試訳

### 『オルディナティオ』第2巻第3区分

#### 第1部

#### 個体化の原理について

#### 第7問題

同じ種において複数の天使があることは可能であるのか

212. 第七に、そして最後にこの題材をめぐって、同じ種において複数の天使があることは可能であるのかを私は探求する<sup>2</sup>。

213. そうではない。

---

<sup>2</sup> Cf. ドゥンス・スコトゥス『「命題集」講義録』第2巻第3区分第1部第7問題；『パリ報告集（レポルタティオ）』IIA第3区分第1部第1問題。

その理由は以下の通りである。哲学者〔アリストテレス〕は『形而上学』第7巻「定義の諸部分について」の章の終わりで、「質料なしにあるものどもにおいては、何であるかということ〔*quod-quid-est*〕〔すなわち本質〕と、その何であるかということがそれのものであるところのもの〔*illud cuius est*〕が同じである」と言う<sup>3</sup>。それゆえ、天使は質料なしにあるのだから、天使の何であるかということは天使そのものと同じである。したがって、一方の天使の何であるかということが他方の天使の何であるかということから区別されるのでない限り、〔一方の〕天使が〔他方の〕天使から区別されることは不可能である。したがって、同じ何であるかということの下では諸天使における個体の区別はありえない。

214. さらに、アヴィセンナは『形而上学』第9巻で諸々の知性体の秩序を描定している。そこで彼は、下位の知性体はその知性体をいわば創造する上位の知性体から産出されるということを主張しているように思われる<sup>4</sup>。ところでそうした因果性は、何らのものにおいても、同じ種に属する他のものとの関わりでは存在しない。〔したがって、諸天使は種的に異なる。〕

215. さらに、私は理性によって議論する。すべての形相的差異は種差である。〔ところで〕諸天使は、複数ありかつ形相であるのだから、何らかの形相的差異によって異なる。したがって、それらは種的に異なる。

216. 大前提〔すなわち、すべての形相的差異は種差であるということ〕の証明は〔アリストテレスの〕『形而上学』第8巻〔第3章 1043b32–1044a11〕から取られる。そこでは、諸形相が数に対照されており、その諸々の数において付加されるものや引

---

<sup>3</sup> アリストテレス『形而上学』第7巻第11章 1037a32–b5「結合的実体のうちには、たとえばシモン<sup>3</sup>の鼻とかあるいはこのカリアスとかのうちには、質料も内在している、ということをも述べた。さらにわれわれは、或るものどもの場合には、その各々の本質とその各々が同じであるが、——というのは、第一の実体の場合がそうである、たとえば、「曲がり」と「曲がりの本質」とは同じである（かりに「曲がり」を第一の実体だとすれば）、ただしこの第一の実体と私の言っているのは、或るものが或る他の質料としての基体のうちに存在するというようには言われえない或るもの〔或る抽象的・普遍的な存在〕のことであるが、——しかし、質料としてのあるいは質料と結びついたものとしての或るものは、その本質と同じではない」（アリストテレス全集旧 12, pp. 247–48）。Cf. 本区分第1部第5–6問題第133段落；第182段落；第204段落。

<sup>4</sup> アヴィセンナ『形而上学』第9巻第4章（Van Riet, 1980, p. 482, ll. 64–66）「さて私たちは、或る一つの存在から、後になって相対的多数性がそれに続くであろう〔別の〕或る一つの本質が出てくることを妨げない」（I）。

かれるものは何であれ種を変化させる<sup>5</sup>。それゆえ、云々。

217. また〔その大前提は、アリストテレスの〕『形而上学』第10巻の終わりから二つ目の章で別様に証明される。「男性と女性は種という点で異ならない。なぜなら男性性と女性性は、人間性の形相の質料的差異でしかないからである」<sup>6</sup>。——このことに基づいてアリストテレスは、すべての形相的差異は種という点で区別するということを是とする。またさらに、形相と種は同じものであるのだから、したがって云々。

218. さらに、「質料から分離された」形相はすべて、自らにおいてその種の完全性全体を持つ。したがって、もし（この天使の形相として）そうした或る形相が〔或る一つの〕種において措定され、また〔それとは〕別の形相が〔その同じ種において〕措定されるとするなら、〔一方の天使が持つ〕あの形相は〔他方の天使が持つ〕この形相であり、〔他方の天使が持つ〕この形相は〔一方の天使が持つ〕あの形相であることになる。なぜなら、どちらの天使も質料から分離された形相であり、そこからの帰結として、任意の天使はどれも種全体の完全性を持つからである。〔それゆえ、諸天使は種的に異なる。〕

219. 前件〔すなわち、質料から分離された形相はすべて、自らにおいてその種の完全性全体を持つということ〕の証明は次の通りである。形相が種の本質全体を持たないということは、それが本質を分有しているということによる。ところで、形相が分

<sup>5</sup> アリストテレス『形而上学』第8巻第3章 1043b32–1044a11「同じく明白なことは、たとえば実体がなんらかの意味で数であるとしても、それはこの意味でそうなのであって、或る人々の説くがごとく単位から成るものとしての数であるのではない、ということである。というのは、定義は或る種の数だからである。なぜなら、定義は可分割的なもので、しかもこれ以上には分割されないもの〔最下の種〕にまで分割せられるものであるが（というのは説明方式〔の構成部分〕は無限ではないからであるが）、数もまたこのようなものだからである。また、或る数を成す部分の幾つかがその数から減ぜられまたはその数に加えられると、たとえどれほどわずかが減ぜられようと加えられようと、もはやその数はもとの数と同じ数ではなくて異なる数であるが、あたかもそのように、定義にしても本質にしても、その構成部分のいずれかがそれから減ぜられまたはなにかがそれに加えられると、もはや同じそれではないであろうから〔後略〕」（アリストテレス全集旧 12, p. 279）。

<sup>6</sup> アリストテレス『形而上学』第10巻第9章 1058a29–34「しかし、そうすると、つぎのような難問が提起されるであろう、すなわち、なにゆえに女は男とその種において差別されないのか、しかも女性〔雌性〕と男性〔雄性〕とは反対のものどもであり、これらの差別性は反対性であるのに、と。または、なにゆえに雌の動物と雄の動物とはその種において異なっていないのか、しかもこの差別性は、白さと黒さのように〔付帶的に〕ではなしに、自体的に、動物のものであり、動物としてのかぎりのいかなる動物にも雌性か雄性かが属しているのに、という難問が」（アリストテレス全集旧 12, pp. 351–52）；1058b21–23「雄というのと雌というのとは、動物に本来固有の属性ではあるが、その実体〔説明方式〕に関してのことではなくて、その質料すなわち肉体のうちにあることである」（p. 353）。



有によって形相の本質を持つのは、それが質料においてあるからにほかならない。したがって、云々。

220. さらには、諸々の完全な存在者においては、本性から意図されないものは何もない。しかるに数的複数性は、自体的には本性から意図されない。なぜなら、数的差異は——それ自体に関する限り——無限に意図されうるが、ところで無限性は、自体的には何らの能動者によっても意図されないからである。それゆえ、数的複数性は諸々の完全な存在者においては無い。ところで、諸天使においてあるものどもは、宇宙の最も完全な存在者としての諸天使に適合する。それゆえ諸天使においては、数的差異はなく、むしろ、そのうちに宇宙の美しさが主要な仕方で存立している種的差異があるのみである。

221. 以上〔すなわち第220段落〕が補強される。本性の意図は、宇宙の秩序に属する諸々の存在者において自体的に成り立っている。——だが、宇宙の秩序に属する存在者であるのは諸々の種であって諸個体ではない。ところで、諸天使においては、宇宙の秩序や美しさに属さないものは何もない。それゆえ、諸天使においてはいかなる数的差異もない。

222. さらには、『魂について』第2巻で哲学者〔アリストテレス〕は、諸個体の多数性は種の救いのため以外のものではないと言っているように思われる<sup>7</sup>。しかるに、不可滅的なものどもにおいては、一個体において本性が十分に救われる。したがって、云々〔すなわち、天使は不可滅的であるので、一個体において一つの種的本性が十分に救われる〕<sup>8</sup>。

---

<sup>7</sup> アリストテレス『魂について』第2巻第4章415a26–415b7「生物にとって、それが完全であり、欠陥があつたりひとりでに発生するものではないかぎり、その諸活動のなかで最も自然本性的なのは自分自身に似た別のものを生み出すこと——動物が動物を生み、植物が植物を生むこと——だからである。そのような活動は、可能なかぎり永遠なるものや神的なものに与ることを目的としている。実際、すべての生物はそのことを求めているのであり、自然本性に従っておこなうことはすべてそのためにおこなうのである〔中略〕。さて、可滅的なものはどれも、同一性を保って数的に一つのまずっと存続することは不可能であるために、永遠なるものや神的なものに間断なく連続して関与することはできない。そのため、個々のものが永遠で神的なものに与ることが可能であるまさにその仕方で生物は神的なものに与る——ただしその与り方には大小の程度の差はあるにせよ——のである。つまり自分自身は存続しないが自分に似たものが存続するのであり、それは数的には同一ではないが帰属する〈種〉における一性を保持するのである」（アリストテレス全集新7, p. 80）。

<sup>8</sup> Cf. トマス・アクィナス『「命題集」註解』第2巻第3区分第1問題第4項第1反対異論



223. 以上〔すなわち第222段落〕は、哲学者〔アリストテレス〕の『天地論』〔*Caeli et mundi*〕第1巻によっても補強される<sup>9</sup>。その理由は次の通りである。諸天体においては、例えば一つの太陽や一つの月のように、一つの種に一個体しかない。それゆえ、云々〔すなわち、天体よりも上位にある天使においても、ましてなおさら一つの種に一個体しかない〕<sup>10</sup>。

224. 以上〔すなわち第213–223段落〕に反対する。

ダマスケヌス、彼の『初歩』〔*Elementarium*〕<sup>11</sup>、第12章<sup>12</sup>。

### I. 問題に対して

#### A. 他の人々の意見

225. 個体化に関する先行する諸問題に対して、個体化の原理は量ないし質料<sup>13</sup>で

---

（Mandonnet, p. 96）「一つの種に属する諸個体の多数化は、一個体では救われえない種の永続性を保存するため以外のものではない。それゆえ、諸々の不可滅的物体においては、例えば太陽や月のように、一つの種には一個体しかない。しかるに、天使は不可滅の実体である。それゆえ、一つの種に複数の天使が属するのではない」（I）。

<sup>9</sup> アリストテレス『天界について』第1巻第9章278b1–8「総じて言えば、その本質存在が何か基礎的な素材のうちにあるかぎりのものは、何か基礎となる素材があるのでなければ何一つ生成することはできないのである。／そして天は個物の一つであり、素材から成るものの一つである。だがもしそれが素材の一部からではなく、その全部からできているなら、天それ自体とこの天とは「ある」ということが異なっているともし、それは全部の素材を包括しているのだから、もう一つ別の天は存在しないだろうし、一つより多くの天が生じることも不可能だろう」（アリストテレス全集新5, pp. 57–58）。

<sup>10</sup> Cf. トマス・アクィナス『「命題集」註解』第2巻第3区分第1問題第4項第2反対異論（Mandonnet, p. 96）「天使は任意の物体よりも完全である。しかるに或る物体は、自らの本性のいかなるものも自身の外にはないというほどの完全性に達しており、それは自らの種の質料全体から成立しているものどもにおいて明らかな通りである。すなわち、それは〔アリストテレスの〕『天地論』第1巻〔テキスト92から98〕において言われるように天において明らかな通りである。それゆえ、ましてなおさら一つの天使の外にはその種に属する何らのものもないと思われる」（I）。

<sup>11</sup> ヴァチカン版の註（p. 498, n. 2）によれば、ダマスケヌスの二つの小著、『諸教義の初歩入門』（*Introductio dogmatum elementaris*）ないし『初歩』（*Elementarium*）と『キリストにおける二つの意志、二つの本性、一つのヒュポスタシスについて』（*De duabus in Christo voluntatibus et de duabus naturis et una hypostasi*）はいくつかの写本において一緒になって結合されて見出される。それゆえ時折、スコラ学者たちによって、一方の名によってその両方が指されているのであろう（H）。

<sup>12</sup> ダマスケヌス『キリストにおける二つの意志、二つの本性、一つのヒュポスタシスについて』第3節。

<sup>13</sup> 量については本区分第1部第4問題第71段落；第5–6問題第148段落；第153–54段落を、質料については第5–6問題第132段落を見よ。

あると言う人々曰く、このことによる帰結として、この問題に対しては否定的に、すなわち同じ種において複数の天使があることはできない。なぜなら天使たちにおいては、量や質料といった、種の「個的差異」の諸原理は見出されえないからである、と<sup>14</sup>。そして彼らは、このことが単に「天使の本性に関わる」内在的不可能性という点のみならず「神の力能に関わる」外在的不可能性<sup>15</sup>という点においても不可能であると言わざるをえない。なぜなら、それ「すなわち、天使が本性的に不可滅的であることと、量ないし質料を個体化の原理として持つことにより何らかの変化を受容すること<sup>16</sup>」は端的に両立不可能であるからして、天使の本性には個的区別が適当でありえず、このことから、厳密にはそうした個的区別の原理でありうるものは天使の本性に相反するからである<sup>17</sup>。例えば、もしそれらによって諸々の種が区別されるであるような別々の現実性が動物「という本性」と相反したとするなら、動物「という本性」の下には種が複数あることは両立不可能だったであろう。

226. ところで、この意見の諸基礎は前に、先行する諸問題<sup>18</sup>において反証されていた。

## B. 自身の意見

---

<sup>14</sup> トマス・アクィナス『「命題集」註解』第2巻第3区分第1問題第4項主文；第4巻第12区分第1問題第1項第3小問題第3異論解答；『対異教徒大全』第2巻第93章；『神学大全』第1部第50問題第4項主文；第76問題第2項第1異論解答「知性的魂は、天使と同じく、それに基づいて自らが存在するとき質料を有しない。それでいてやはり、それは何らかの質料の形相なのであって、こうしたことは天使には適合しないところである。かくして、質料の区分に基づいて、一つの種に属する多数の魂が存在する。多数の天使が一つの種に属するということはまったくありえないところなのであるが」(神学大全6, p. 48)；エギディウス・ロマーヌス『第2任意討論集』第7問題主文；フォンテーヌのゴドフロワ『第6任意討論集』第16問題主文。

<sup>15</sup> Cf. エティエンヌ・タンピエ『1277年の禁令』第81項「知性実体は質料をもたないゆえに、神は同じ種に属する多数の知性実体を造ることはできない」(中世思想原典集成I, 13, p. 656)；ガンのヘンリクス『第2任意討論集』第8問題；『第11任意討論集』第1問題；エギディウス・ロマーヌス『第2任意討論集』第7問題；フォンテーヌのゴドフロワ『第6任意討論集』第16問題主文；『第12任意討論集』第5問題主文。

<sup>16</sup> この補足についてはブルノワの註解(Boulnois, p. 168)を参考にした(I)。

<sup>17</sup> 写本Vを参考にして《repugnat praecise》の語順のように《praecise》を理解すると、「厳密には…」以降の箇所は、「そうした個的区別の原理でありうるものは「それだけで」[praecise]天使の本性に相反するからである」のように訳すことができる(H)。

<sup>18</sup> 量については本区分第1部第4問題第75-104段落と第5-6問題第155-67段落を、質料については第5-6問題第136-41段落と第200段落を見よ。

227. したがって、端的に対立する結論、すなわち、同じ種において複数の天使があることは端的に可能であるということが保持されるべきである。

このことが証明される。

第一に、理由は次の通りである。何性はすべて——それ自体に関する限り——共通化可能であり、神の何性でさえそうである。ところでいかなる何性も、それが無限なものでない限り、数的同一性において共通化可能ではない。したがって、[無限な何性以外の]他の任意の何性は共通化可能であり、かつ、このことは数的区別を伴う。——かくして提起されたことが得られる。さて、すべての何性が共通化可能であるということは明らかである。その理由は次の通りである。このことは、完全性に基づいては何性に相反しない。というのも、このことは神の何性に適合するからである。——また不完全性に基づいて何性に相反するのでもない。というのも、このことは生成消滅しうるものどもに適合するからである。そのようなわけで、云々。

228. さらに、被造物の任意の何性はどれも、矛盾なく、普遍の理拠の下で知解されうる。ところで、もし被造物の何性がそれ自体で「これ」であったとするなら、その何性を普遍の理拠の下で知解することは矛盾であっただろう（それは、神の本質を普遍性の理拠の下で知解することが矛盾であると同様である）。なぜなら、[その場合には]知解することの理拠がその知解される対象に相反するからであり、すなわち、知解されたものが偽であるからである。したがって、云々<sup>19</sup>。

229. さらに、もし神がこの種におけるこの天使を無化させることができるなら、その天使が無化されても神はその種を新たに他の或る個体において産出することができる。なぜなら、この個別者の無化によって、このことが種の存在に相反するのではないからである。というのも、そうでなければ種は、キマイラのように単に虚構の存在者であったからである。それゆえ神は、或る個体において種そのものを再び産出することができる。さもないれば神は、始めに作ったのと同じ宇宙の秩序を作

<sup>19</sup> 挿入：あるいは次の通りである。いかなる「被造の何性」もそれ自体ではこれではないのであって、それは普遍として捉えられうる。なぜなら、その理拠には個別性は含まれないからである（そしてそれゆえ、神は普遍ではありえない。なぜなら、それはそれ自体でこれであるからであり、被造の何性に適合する類や[種]差を持たないからでもある）。したがって任意の何性はどれも、それ自体では「これ」ではない諸原理を持つことから、普遍の理拠の下で知解されうることになる。しかるに、「普遍」の理拠には、それが複数のものへと複数化されうることが属する。なぜなら「普遍」とは、同じ理拠に即して複数のものについて言われうるものとして、これやあれに対する中立に即して知解されるということに基づいているからである。——そしてそれは種の理拠によって補強される[なぜなら、「種はそれ自体では多数のものについて言われうるものだからである」] (I)。

ることができないことになっただろうからである。しかるに、「人間は、知性的魂が数という点で同じまま留まるのでない限り、数という点で同じものとして復活することはできなかつただろう」という意見に属する人々によれば、「神が種そのものを再び産出することができるのは、滅ぼされた個体である」それにおいてではない<sup>20</sup>。

230. さらに、諸々の知性的魂は同じ種において数という点で区別されるが、ただしそれらは、質料を完成させるものではあるものの、純粹形相である。したがって、それらが同じ種において数という点で区別されるということの不可能性は、諸形相の側にはない。というのも、諸天使において、形相の理拠という点においてそうした不可能性を結論づけるものは何であれ、諸々の魂においても「そうした不可能性を」結論づけたらうからである。

231. だがもし君が、諸々の魂は相異なる身体への傾向を持っているのであるからして、それらは、質料を完成させることへの適性を持っており、そしてそれゆえ、相異なる関係〔habitus〕によって区別される、と言うとしよう<sup>21</sup>。——これに反対する。

そうした傾向は絶対的存在性ではない<sup>22</sup>。なぜなら、何らのものも自分へと傾向づけられることはできないからである。したがって、その傾向は或る絶対的で区別された存在性を前提する<sup>23</sup>のであるからして、その先行するものにおいてこの魂はあの魂から区別される。それゆえ諸々の魂は、区別することの形相的理拠としてのこの種の諸関係なしに区別される。

232. 以上「すなわち第 231 段落におけるスコトゥスの反論」が補強される。それは次の通りである。そうした適性は魂の形相的理拠に属することができない。なぜなら、それは関係〔respectus〕であり、ところで、関係は或る絶対的なものの形相的理拠には属さないからである。

233. また魂は、この魂であるがゆえにこの傾向を持つのであり、その逆ではない（なぜなら、形相は質料の目的であり、その逆ではないからである）。したがってこの

<sup>20</sup> トマス・アクィナス『「命題集」註解』第 4 巻第 44 区分第 1 問題第 1 項第 2 小問題第 1 異論解答；第 4 異論解答。

<sup>21</sup> Cf. フォンテーヌのゴドフロワ『第 6 任意討論集』第 16 問題主文。

<sup>22</sup> ここでの議論は、「個体化するものが絶対的存在性である」ということを第 6 問題で既に証明されたこととして前提している (H)。

<sup>23</sup> すなわち、傾向の基体となるような存在性を前提すること。つまり「A の B への傾向」は、基体として A を前提とするということの意味する (H)。

傾向は、この魂があることの理拠であるのではなくて、むしろこの魂を前提する。

234. 複数の魂があるのと同様にして同じ種の内に複数の天使があることは可能だということは、或る人々によっても補強される。彼らにとっては、或る種が、端的には知性的本性に属しながらも、その全体が同時に破滅させられているのは不整合なことである<sup>24</sup>。ところで、一つの種に一つの天使を指定するという立場が指定される場合には、それらにおいてはいかなる種も救われていないであろう諸天使の種が多数あったことになるだろう。したがって、[一つの種に一つの天使を指定する] 立場は真ではない。

235. そして第一命題 [すなわち、第 234 段落の大前提のことで、あらゆる種は救われるべきであるということ] は次のことによって納得させられる。アウグスティヌスが『エンキリディオン』第 29 章で曰く「普遍的支配者 [である神] は次のことに満足した。すなわち、多数の諸天使全体が神を見捨てることでなくなってしまったわけではなかったので、なくなってしまった多数のものは永続的破滅の内に留まり続けるであろうが、他方で、その多数が [神を] 見捨てても神とともにあり続けた多数のものは、最も確かな仕方で常に認識される未来の自らの幸福に喜ぶことになるう。だがそれに対して、人間たちにおいてあった理性的本性は、諸々の罪と罰によって全体がなくなってしまったので、部分的に回復されるに値した。——そこで、かの [悪魔的] 墮落によって少なくなった分が、諸天使の欠損した集団 [の代わり] に結び付けられることになるう。[ところで] 諸天使におけるそうした全体性と部分性は、いかなる天使の種もすべての個体に関して全面的になくなってしまったわけではないと指定されることがない限り、合理的ではないと思われるのであるからして、いかなる種であれ、その種に属する或る諸天使は滅んで、或る諸天使はあり続けた。かくして、云々。

<sup>24</sup> トマス・アクィナス『「命題集」註解』第3巻第20区分第1問題第1項第1小問題主文 (Moos, pp. 612–13, n. 18) 「人間本性が、それが失楽してしまった所から回復されるのが最も適切なことだった。／その理由は以下の通りである。それは神自身に関する限りで適合的であった。なぜなら、この点において神の慈悲、能力、および知恵が明白となるからである。[中略] それは人間本性に関する限りでも適合的であった。なぜなら、人間本性は全般的に失楽していたからである」；第3異論解答 (p. 613, n. 21) 「天使の本性は全体が落ちてしまったわけではない。そしてまた、罪を犯す天使は直ちに悪において確かなものとされていた一方で、人間はそうではなかった。そしてそれゆえ、人間本性は回復されるべきだった一方で、天使の本性はそうではなかった」。ブルノワによれば (Boulnois, p. 171)、ここでスコトゥスはトマスのような論敵の矛盾を明らかにしている。すなわち、一方では、知知的な本性を持つ種の全体が同時に破滅させられるべきではないという大前提を保持しつつも、もし各天使に固有の種を認めるなら、悪に傾いて破滅させられた天使が存在するのだから、大前提が成り立たなくなるという論理である (I)。



236. さらに、天使の何性がそれ自体では複数のものに共通化可能であることが是認されるなら、そこからの帰結としてそれは——それ自体に関する限り——無限なものどもに共通化可能である（なぜなら、数的多数性の側からは不可能性の理拠がないからである）。もし、産出された「本性」そのものがこの個体においてあることによって、それが複数のものにおいてあることの可能性が消去されるとするなら、その場合にその本性は自らの共通化可能性全体に即してこの個体においてあり、しかもそこからの帰結として、それは無限にそうである。なぜなら、その本性は自らの何性に即しては無限に共通化可能だからである。したがって、あの一つの天使は形相的に無限であることになろう<sup>25</sup>。[この] 帰結は不適合である。それゆえ、何らかの前件も不整合である<sup>26</sup>。

237. したがって、私は次のように言う。それ自体では純粹現実態でない本性はすべて——本性がそれに即してあるところの实在性〔*realitas*〕に即しては——、本性がそれによってこれであるところの实在性に対して可能態的でありえ、そこからの帰結として、それは「これ」でありうる。そして、本性がそれ自体では個別的なものとしてのいかなる存在性も含まないのと同様にして、そうした諸々の個別的存在性は、それらがどれだけあろうと、本性に相反することはない。かくして、諸々の個別的存在性においては、それらがどれだけあろうと、本性は見出されうる。しかしながら、それ自体で必然存在〔*necesse-esse*〕であるもの〔すなわち神〕においては、「これ」であ

<sup>25</sup> Cf. 第227段落。「共通化可能」ということは、(1) 数的に異なるものどもについて語られるか、(2) 数的に同じものについて語られるか、のいずれかである。そして(1)の場合は無限でない何性に関して語られ、(2)の場合は無限な何性に関して語られる。数的に一つであるものに関して何性全体が共通化可能であるなら、それは(2)の場合に適合することになる。この議論は、天使の何性がそのようなものであるとすると、天使の何性は形相的に無限であることになり、神となってしまうという不合理を導いている(H)。

<sup>26</sup> 挿入：あるいは次のように議論される。もし天使の何性がそれ自身に即しては複数のものへと複数化されうるとするなら、それは無限なものどもへもそうである。それゆえ、或る一方の天使におけるその何性の受容によって、その何性が他方の天使にとって共通化不可能とされうるのは、その何性がその一方の天使において自らの共通性全体に即してある場合のみである。他方でこうしたことが適合するのは、その何性がその天使において無限なる仕方である場合のみである。なぜなら、その何性は無限なものどもにそれ自体に即しては共通化可能だからである。しかるに、他の人々のこうした論拠は、天使の何性はそれ自体では複数化されうるものであるということ、そしてその何性の共通性全体はこの天使において受容されるということを前提する。そうして議論は進行することになるであろうが、他の人々は前件〔すなわち、天使の何性はそれ自体では複数化されうるものであるということ、そしてその何性の共通性全体はこの天使において受容されるということ〕を否定するはずであろう〔I〕。



ることに対する本性における限定がある。なぜなら、何であれ本性においてありうるものは、必然存在の所にあるからして、もし無限性に対する可能性がそれ自体で本性においてあるとするなら、個別性に対する限定は何らの外在的なものによってもありえないからである<sup>27</sup>。[それに対して]すべての可能的本性においては反対の仕方である。その場合には多数化が属しうる。

### C. 諸々の主要な論拠に対して

238. 第一の議論[すなわち第213段落]に対して私は次のように言う。その箇所では哲学者[アリストテレス]は質料について自体的に（すなわちそれ自体で何性を縮減する存在性について）<sup>28</sup>理解しているとはいえ、しかしながら、複合体の[形相ではない]他方の部分である質料を持つものと、[質料を]持たないものに対して[自体的に理解される限りでの質料を]適用するなら、哲学者[アリストテレス]の意図は次のようであったことを私は是認する。すなわち、或る複合する本性[すなわち複合体の部分]としての質料を持たないものはすべて、自らの何であるかということと第一に同じであるということである<sup>29</sup>。なぜなら彼は、そうした何であるかということすべてを自体的に「これ」[という個体だ]と措定するからである。そしてこのことに対する理由は次の通りである。自らの部分として質料を持たないようなものはすべて、形相的に必然的なものだとは彼は措定した<sup>30</sup>。ところで、形相的に必然的な本性においてありうるものは何であれ、その本性において[現に]ある。——したがって、

<sup>27</sup> Cf. 本書第1巻第8区分第1部第3問題第115段落（VAT, tom. 4, p. 207, ll. 6–9）「離接の様態〔passio disiunctiva〕の一方の肢は形相的に特殊なものであり、「必然存在か可能存在か」という区分における必然存在や、「有限か無限か」という区分における無限のように、そして他のものどもについてそうであるように、その肢はただ一つの存在者にしか適合しないものである」。こういった言明が念頭にあると考えられる（H）。

<sup>28</sup> Cf. 本区分第1部第5–6問題第182段落；第206–7段落。

<sup>29</sup> Cf. 本区分第1部第5–6問題第206–7段落。

<sup>30</sup> Cf. ガンのヘンリクス『第2任意討論集』第8問題主文（HG00, VI, p. 41, ll. 40–49）「かくして哲学者[アリストテレス]は、各々のものが、それが質料から分離されているということのみのゆえに、数という点で一つであると措定し、これに加えてまた、それは被造物ではなくて何らかの神的本性であると措定した。[中略]そしてそれらの任意のものがどれも何らかの神であると措定していることに基づいて、彼は、それらの内の任意のものがどれもそれ自体で何らかの個別性であり何らかの必然存在であると措定している。それは、質料からの分離のゆえにだけではなくて、基体とその現存〔existentia〕に対する本質の中立のゆえにでもある。[中略]実際、複数のものが質料から分離されているということを措定することで、アリストテレスは複数の神と複数の必然存在を措定した。それは全くもって不可能なことである」（I）。

その必然的な何性を持つことができるものは何であれ、[現に] その何性を持つ。なぜなら、その何性においては可能態が現実態から隔たっていないからである。それゆえ彼は、そうした必然的な本性において措定した、諸々の基体〔suppositum〕に対する可能性すべてを現実態においてであると措定した<sup>31</sup>。ところで、もしその必然的な本性において複数の個体に対する可能性があったとするなら、無限なものどもに対する可能性があったことになるであろう。——したがって、現実態において無限なものどもがあったことになるであろう。そのようなわけで、無限性は或る[任意の]本性において[存在すること]は不可能であるのだから、（彼によれば）「この本性」においても無限性に対する不可能性がある。それゆえ彼によれば、その本性はそれ自体で「これ」である。

239. だが「質料を持たない何性はすべて形相的に必然的なものである」という命題において[Cf. 第238段落]、私たちはアリストテレスには不賛成である。——それゆえ、結論[すなわち、自らの部分として質料を持たない何性はすべてそれ自体で個別的存在であるということ、つまりそうした何性においては複数の個体が存在しえないということ]においても不賛成である。その理由は次の通りである。神学者にとっては、[一方のあり方として]そのゆえにアリストテレスが或る結論を保持する原理において哲学者[アリストテレス]に不賛成であることの方が、[他方のあり方として]結論においてアリストテレスとともに誤り、[しかしながら]そのゆえに神学者自身が誤った原理においてはアリストテレスに不賛成であることよりも合理的である。実際、後者のようにしてアリストテレスに賛成であることは、哲学することでもないし神学的に考えることでもない。その理由は次の通りである。そのような者は、哲学者

<sup>31</sup> アリストテレス『形而上学』第12巻第6章1071b20–22「さらにこのような実体は、質料なしに存在するものであらねばならない、なぜなら、もしほかに、永遠なものがあるとすれば、まさにこうした実体こそ、永遠なものであらねばならないから。だから、現実態である」(アリストテレス全集旧12, p. 414)；第8章1073a36–38「明らかに、それゆえ、[これらの星の移動すなわち運行の多くあるだけ]それだけ多くの実体があり、そしてこれらの実体の本性は永遠的であり、それ自体において不動であり、そして(前述の理由により)大きさのないものである」(p. 423)；同1074a15–22「[自らは動かないでこれらの天球を動かすところの]不動の諸実体または諸原理も、当然、それだけ多くあると想定されてよからう(けだし、[ここでは当然と言うにとどめ]必然的にそうだと断言することは、より有力なその道の学者にゆずっておこう)。だが、もしいかなる星の運行をも目ざしていないような移動[場所的運動]がひとつもないとすれば、そしてまた、およそなにもの働きをも受けず[全く非受動的で]最高の善を自体的に具有しているようなあらゆる実在、あらゆる実体は、すべて或る終り[目的]と見なさるべきであるとすれば、あれら[不動の諸実体]よりほかにいかなる他のそのような実在もありえず、かえってそれがあれら諸実体の数であらねばならない」(pp. 425–26)。

〔アリストテレス〕<sup>32</sup>において妥当であるような論拠〔としての原理〕を持たない。なぜなら哲学者〔アリストテレス〕も、その原理のゆえでなければ結論を是認しなかっただろうからである。またそのような者は、結論に対しても自らの神学的原理を持たない。なぜなら、その結論に対してあるのは厳密には、神学者<sup>33</sup>が否定する哲学的原理だからである<sup>34</sup>。

<sup>32</sup> ヴァチカン版では大文字で「哲学者」(Philosophus)と示されているこの語は、可能性としてはアリストテレスだけでなく広い意味で「哲学者」のことを指していると理解することは可能である。その場合、哲学者一般において妥当であるような原理を持たないということが、「そのような者」が哲学する者ではないことの理由として明示されていることになる(H)。

<sup>33</sup> Cf. ガンのヘンリクス『第2任意討論集』第8問題主文(HGOO, VI, p. 41, l. 50–p. 42, l. 70)  
「では、もし哲学者〔アリストテレス〕が、諸々の分離された形相にあっては、一つの種、すなわち一つの本質には唯一の個体しかないと言うなら、何が驚くべきことであるのか。実際このことは、彼が「同じ種の下に複数の個体があるのは質料によってのみである」と偽によって措定したということよりも、むしろ、別の流神的なこと——それはいわば流神者が措定したことである——、すなわち、その諸形相の任意のものがどれも何らかの神であり何らかの必然存在であるということを措定したことから必然性をもって帰結する。それゆえ、私たちのうち哲学する者たちは、もしこの帰結、すなわち、諸々の分離された形相にあって一つの種の下では、すなわち一つの本質——なぜならその諸形相においては種の理拠が固有にはあるはずがないからである——の下では、唯一の個体しかありえないということにおいて哲学者〔アリストテレス〕に続こうとするなら、第一の前件、すなわち、質料の欠如のゆえに同じ種の下には複数の個体がないということにおいてというよりも、むしろ、第二の前件、すなわち、その諸形相の任意のものがどれも何らかの神であり何らかの必然存在——それにおいては本質と存在、基体と現存は異ならない——であるということにおいて、アリストテレスに続くのが必然である。／あるいはもし、その哲学する者たちが、この第一の前件を否定し第二の前件、すなわち、諸々の分離された形相は創造されうる本質である〔中略〕——ということを措定とするなら、その諸形相の任意のものはどれも、それ自身に関する限り、複数の基体へと多数化可能なものであると措定することが必然であるはずである」(H)。

<sup>34</sup> 註記：〔第213段落に対する〕解答〔である第238–39段落〕は次の点において成り立っている。質料は、一方の仕方では複合体の〔内の形相とは〕別の(可能態的)部分として、他方の仕方では何性を縮減する態勢〔dispositio〕として、あるいは何性の理拠の外にある存在性なら何であれそれとして解される。そしてこのことに即せば、質料を持たないものどもは二通りに理解されうる。同様に述語の側からも〔二通りの理解の仕方が〕区別されるべきである。すなわち、「何であるかということは、その何であるかということがそれのものであるところのもの〔illud cuius est〕と同じである」ということは二通りに理解されうる。一方の仕方では実在的同一性について理解されうるのであり、そしてその場合、何であるかということは、質料を持っていようと持っていまいと、その何であるかということがそれのものであるところのものとして実在的に同じである(なぜなら、アリストテレスが『形而上学』第7巻の)「定義の一性について」〔本当は「定義の同一性について」〕という章〔1031a17–18〕の冒頭において議論しているように、「個々のものは自らの実体以外の何ものであるのでもないと思われる」からであり、これは詭弁的論拠ではなくて論証的論拠である)。他方の仕方では最も厳密な同一性について理解されうるのであり、そしてその場合、何であるかということが、その何であるかということがそれのものであるところのものと同じであるのは、何性を持つものが単に何性であるのみで他のものではない場合である(他のものとは実際、哲学者〔アリストテレス〕が質料を持たないものどもにおいて「複合体の別の部分」として措定したであろうもの〔すなわち可能態的部分〕のことである。なぜなら、彼が措定することには、質料を持たないものどもにおいて質料は第二の仕方ではないということが以上のことから帰結するのであり、それらにおいては

240. 同じことによって〔第214段落における〕アヴィセンナに対して私は次のように言う。彼の意図は、一つの種において一つの天使があるということであったが、この結論が依拠している命題——すなわち「上位の天使は下位の天使を原因する」のことであり、それは彼が「或る一つの同じ仕方であるものからは、たった一つのものしかありえない」<sup>35</sup>と措定するゆえである——は、いかなる神学者およびカトリック信徒によっても是認されない。そのようなわけで、アヴィセンナの結論はどの神学者によっても是認されるはずはない。

241. 第一の理性〔による議論、すなわち第215段落〕に対しては別の所で次のように言われていた<sup>36</sup>。形相的差異は〔第一に〕形相における差異として解されうる（そ

---

ただ何性があつて何性を縮減する何らの制約もないからである。それは上で〔すなわち第238段落で〕措定された論拠のゆえである。すなわち、質料を持たないものどもは形相的に必然的なものだからである）。——以上によって〔私が〕議論の形式〔forma rationis〕に対して〔言うこと〕は次の通りである。質料を持たないものどもにおいては、第一の仕方でも第二の仕方でも、何であるかということは、その何であるかということがそれのものであるところのものと同じである。しかるに、諸天使がこのようなものだと言われる場合、小前提〔すなわち、天使の何であるかということは天使そのものと同じであるということ〕は偽である。実際、諸天使においては（第一の仕方ではないとはいえ）第二の仕方では真理に即して質料がある。なぜなら、神学者が否定するはずの原理のゆえにアリストテレスはこのこと〔すなわち、天使がそれ自体で「これ」であるということ〕を措定したのではあるが、いかなる天使もそれ自体では「これ」ではないからである（I）。

<sup>35</sup> アヴィセンナ『形而上学』第9巻第4章（Van Riet, 1980, p. 481, ll. 50–51）「また、一つのものである限りでの一つのものからは、一つのものしか出てこないということを知りなさい」（I）。

<sup>36</sup> Cf. 本書第1巻第17区分第2部第2問題第255段落（VAT, tom. 5, p. 262, ll. 3–15）「形相に対しては次のようにも言われうる。形相的ということについて固有に語るなら、すなわち形相的差異が諸形相に即した差異である限りにおいては、すべての形相的差異が形相的であるわけではない。それは、人間たちのすべての差異が人間性における差異であるわけではないのと同様である。このことの論拠は実在的にも論理的にも割り当てられうる。実在的には次の通りである。人間たちは、人間性を持って、かつ、人間性によってではないにしろ異なることができる。——かくして、人間たちは人間性において異なるのであるからして、諸々の純粹形相は、異なることができ、かつしかしながら、形相性によっては異なるのであるからして、形相的にも異なる。なぜなら、固有に語るなら、形相的に異なることは、形相においてないし形相に即して異なることと同じだからである〔\*〕。論理的には次の通りである。差異という名辞は、差異に含まれる否定によって理解されるがゆえに、そうした否定から見ると、混同した仕方でも周延的に解されうるのであるからして、差異の理拠であると名指されているものも混同した仕方でも周延的に解されうる。〔\*〕挿入：〔実在する〕事物に対しては次のようにも私は言う。或るものどもは相互に種という点で異なりうるが、しかしながらそうした差異を第三のものにおいて原因するわけではない。白いものと黒いものは種という点で異なるが、しかしながら白いソクラテスと黒いプラトンは種という点で異なるわけではないということと同様に、諸々の個的差異は、第一に相異なるものではあるが、しかしながら本質を変化させるわけではない。なぜならそれらは、本質に附帯し、本質から見ると質料的だからである。男性的と女性的についてもそうであり、形相からそれ自体に即して見た諸々の度合いについてもそうである。その形相は、自らの存在に即しては或る特定の度合いを自身に対して限定しない（I）。

してこれこそが、「形相的差異」と言われるものを固有に表示していると思われる）。——あるいは〔第二に〕諸形相の差異として受け取られうる。無論それは、異なることの理拠においてあるようにして形相においてあるのではない。

242. 第一の仕方では大前提〔すなわち、すべての形相的差異が種差であるということ〕は是認されえて、そしてその場合、小前提〔すなわち、諸天使が形相的差異によって異なるということ〕が偽である。さて、小前提の証明、すなわち「天使が〔別の〕天使と異なるのはそれが形相だからである。したがって、それらは形相的差異を持つ」ということは帰結の誤謬を含む。その理由は次の通りである。「諸天使は形相という点で異なる。それゆえ、それらは形相的に異なる（ないしは形相において異なる）」ということとは帰結しない。それは、「複数の人間は異なる。それゆえ、それらは人間性において異なる」ということが帰結しないのと同様である。実際、「或るものが区別されること」と「それが区別すること（ないし区別）の第一の理拠であること」は別々のことである。なぜなら、或るものが区別されているということと、それが区別することの理拠でもあるということは両立する一方で、その或るものが区別することの理拠そのものであるということと、それが区別されているということは両立しないからである<sup>37</sup>。小前提の証明が帰結の誤謬を含むことに対しては論理的論拠もある。それは次の通りである。「差異」という名称に含まれる否定は、「これ」という関係項を混同した仕方では周延的に（confuse et distributive）混同させているだけではなくて、それにおいて差異があることが知られる限りでの、差異を種別化するものも、混同した仕方では周延的に混同させている。実際この差異は（「差異」という名称に含まれる否定に関する限り）混同させられている。なぜなら、もしソクラテスがプラトンと白性において異なるなら、ソクラテスはこの白性においてもあの白性においてもプラトンと同じではないからである。——他方で、もし大前提〔すなわち、すべての形相的差異が種差であるということ〕が固有でない仕方では、すなわち〔諸形相の差異として解されうるという〕第二の理解に即して解されるとするなら、私は大前提を否定する。

243. 〔第 215 段落の大前提「すべての形相的差異は種差である」ということに対する、第 216 段落における〕証明に対して私は次のように言う。哲学者〔アリストテレス〕は（『形而上学』第 8 巻〔第 3 章 1043b32–36〕で）何性を示す限りでの形相に

<sup>37</sup> 「或るものが区別の理拠であるならば、そのものが区別されている」ことは真であるが、「或るものが区別されているならば、そのものが区別の理拠そのものである」ことは真ではない(H)。



ついて語っている。そのことは、諸々の数に対する諸形相の第一の対照に基づいて明瞭である。実際、彼は次のように語っている。「もし」彼曰く「諸実体が或る仕方では諸々の数であるなら、それは次のような仕方である。すなわち、定義は不可分のものどもへと可分的な何らかの数である（というのも、諸理拠は無限ではないからである）。ところで、数はそのようなものである[。それゆえ定義は何らかの数である]」<sup>38</sup>。すなわち、諸定義の分解が不可分のものの所で止まるのは、諸々の数の分解も不可分のものの所で止まるのと同様である。そしてそのような定義は、アリストテレスが「実体」と呼ぶものの定義、すなわち何性の定義のことであって、何性の「質料とは」別の部分である形相の定義のことではない。

244. 形相が何性を示すという仕方では「語るなら」私は次のように言う。種を変化させるのでない限り何ものも形相には付加されない。まず「端的に」そうである。すなわち、或る一つの種から別の（反対のないし違いのある）種を作るといったことでない限りはそうである。——あるいは「或るものに即して」そうである。すなわち、そのようではない種〔*species non-talis*〕から別の種を作るといったことでない限りはそうである（例えば、もし「何性的存在に帰属する」差異が類に付加されるとするなら、その差異は最も特殊な種を作るのであり、そのような最も特殊な種が先立ってあったのではなくて、ただ中間の種が先立ってあっただけである）。

245. この仕方でもまた「語るなら」私は次のように言う。下位のものどもにおける本性をめぐってあるものは何であれ、本性には何も付加しない。それが個的固有性であれ、より大きいということないしより小さいということであれ（あるいは、自らの何性的存在においてあるようにしては本性と関わりのない他のものなら何であれ）、この仕方での実体に属する何らのものをも消去しないし付加もしない。このことの例は次のようであるだろう。もし三の部分である限りにおける一が、個的で数的な差異である限りにおける厳密な部分であったとし、しかしながらその一は、それ自体でも増大および減少することができたとするなら、その個的で数的な差異は、自体的には三に属したであろうが、三の部分である限りにおいては附帶的に三に属したであろう。それゆえ、一が増大および減少しても、別の三があるわけではないことになるであろう。

246. それゆえ、「諸形相の区別はどんなものであれ数の区別のようなものである」〔cf.

---

<sup>38</sup> 註5を見よ。



第216段落]と君が言う場合、その区別が、自体的に何性に帰属する形相的存在に即したもののどもに関するものでない限り、それは偽である。そしてここではそうした区別は[問題では]ない。

247. [アリストテレスの]『形而上学』第10巻に関するもの[すなわち第217段落]に対して私は次のように言う。「すべての形相が種という点で異なる」というテキストから[結論を]導出するなら、帰結の誤謬がある。その理由は次の通りである。哲学者[アリストテレス]がそこで真に主張しているのは「形相的でない差異は種差ではない」ということである。しかるに、このことから「種差でない差異は形相的差異ではない」ということ（それは第217段落の異論を提唱する人々が得ようとしていることである）は帰結しない。——それは、それらと同値な諸々の肯定命題において帰結しないのと同様である。なぜなら、全称肯定命題は諸項が同じ仕方である限り置換されないからである<sup>39</sup>。[したがって、云々。]

248. それゆえ哲学者[アリストテレスのテキスト]からは、「[或る]形相的差異のみが種差である」ということは解されうるが、形相におけるすべての差異が種差であるということは受け取られえない。その理由は次の通りである。排他命題は、移動された諸項については肯定命題を導出するとはいえ、しかしながら、移動されない諸項については同じ仕方で肯定命題を導出するわけではない<sup>40</sup>。——むしろ[形相におけるすべての差異が種差であるということが解されうるなら]不定命題を全称肯定命題へと転換させる場合のように、帰結の誤謬がある。それどころか、アリストテレスの『形而上学』第10巻の箇所からは、「諸形相のすべての差異は種差である」という命題とは反対のことが解されうると思われる。実際、白い人間と黒い馬の差異は、諸形相の差異であり、また或る仕方で諸形相によるものであるが、しかしながら（先ほどの箇所におけるアリストテレスによれば）種差ではない<sup>41</sup>。なぜならその諸形相は、それらがそれにおいてある諸本性との関連では「形相的」——すなわち諸個体に付随するもの——である一方で、何性的存在に自体的に付随するもの、ないし何性的存在を自体的に特定化するものではないからである。

<sup>39</sup> ブルノワ (Boulnois, p. 178) は、「すべての X は Y である」から「すべての Y は X である」を引き出すことはできないし、また「すべての猫は動物である」から「すべての動物は猫である」を引き出すこともできないということを具体例として挙げている (I)。

<sup>40</sup> 「或る動物だけが人間である」は、「すべての人間は動物である」を導くが、「すべての動物は人間である」を導かない (H)。

<sup>41</sup> 註6を見よ。

249. 別のもの〔すなわち第 218 段落〕に対して私は次のように言う。もし或る個体が、それが質料なしにあるものであるということにのみ基づいて、無限なものどもにおいてあるようそれ自体では（それ自体に関する限り）本性づけられている、種の完全性全体をそれ自体において持っていたとするなら、質料の欠乏のみに基づいて無限な完全性を持っていたと思われるであろう。ところで、無限な完全性を持ちうるものは何であれ、それを〔現に〕持っている。——かくして任意の種のどれにおいても無限な完全性があることになるであろうし、そこからの帰結として、種の完全性は（類に付加され、最終的な種を構成するところの）最終的差異〔*differentia ultima*〕の限定化ないし種別化ないし制限化によって制限されなかったし限定もされなかったであろう。それは偽であるしすべての哲学者と反対である。したがって、「質料なしにありうる個体は、それが質料なしにあるがゆえに、この欠如的原因のみに基づいて、種の完全性全体を持つ」という〔大前提として〕採用された命題が偽である。なぜなら、もし、この大前提として採用されたことをもって、個体をめぐっては何も実定的に〔*positive*〕生じない（のであってただ分離のみが生じる）ということが措定されるとするなら、先だってなかったものは何も措定されないからである。

他方で、「形相が、もし質料から分離されていたとするなら、それは種の完全性全体を持っていたであろう。なぜなら、それは質料によって分有されうるものではないからである」〔cf. 第 219 段落〕ということが、何らかの蓋然性を持つ限りで理解されるとするなら、質料が、形相を縮減する個的存在性のことを意味するという限りで理解されるのでない限り、その命題は偽であり論点先取を犯している。質料が形相を縮減する個的存在性のことを意味するという仕方で、〔大前提として〕採用された命題の同名異義性を理解するなら、すべての形相は種の完全性全体を持ち、そしてそれはそれ自体で「これ」である。その場合、天使についてその下で採用された小前提は、端的に偽である。なぜなら天使の本質は、複合体の〔形相とは〕別の部分である質料によっては分有されうるものではないとはいえ、しかしながら、複数の質料的なものによって、すなわち諸々の質料的存在性を持つ複数の個体によって分有されうるものだからである。それらの存在性が「質料的」と言われるのは——しばしば既述の通り——何性が「形相」と言われる限りでの縮減された何性との関連によってである<sup>42</sup>。

250. 別のもの〔すなわち第 220 段落〕に対して私は次のように言う。「無限性は意

<sup>42</sup> Cf. 本区分第 1 部第 5-6 問題第 182 段落；第 201 段落；第 206-7 段落；第 7 問題第 238 段落；第 243 段落。

図されない。したがって、複数性も意図されない」という議論の形式において帰結の誤謬がある。その理由は次の通りである。数的複数性は、それ自体では無限ではなくて、無限性に相反しないがゆえに無限性として両立することができるだけだからである。したがって、何者もそれ自体では無限性を意図しないとはいえ、しかしながら、それ自体は無限ではない数的複数性を何者かが意図することはできる。その数的複数性は、無限性と共起するのと同様にして、有限性とも共起するものである。

251. そのようなわけで、[第220–21段落で取りあげられた]人々によって共通に言われていたこと[すなわち、宇宙の秩序や美しさは諸々の種において成り立っているということ]<sup>43</sup>が、真理に即しても理解されうる。

全宇宙においては、諸々の種——そこには秩序に帰属する不等性[*imparitas*]がある——の区別に即して秩序が主要には観取されるとはいえ、しかしながら、アウグスティヌスの『神の国』第19巻第13章[第1節]によれば、「秩序とは、同等なものとは異なるものの、[その]各々に自らの場所を配する、適切な配置である」がゆえに、宇宙の秩序を(自身に内在的な主要な善として)主に意図している能動者[すなわち神]によっては、秩序(すなわち諸々の種の秩序)に対する「一方の要求物」である不等性が意図されるだけでなく、秩序に対する「他方の共立物」である、諸個体の同等性(すなわち同じ種における同等性)も意図される。そして端的には、第一のもの[すなわち神]が「自分とは別の」何かを意図する限りで諸個体は第一のものそのものによって意図されるが、それは目的としてではなくて目的に対する別の何かとしてである。それゆえ、自らの至福のゆえである限りで自らの善性を伝達するために、第一のものは同じ種において複数のものを産出した。そして諸々の最も主要な存在者においては、神から主要な仕方で個体が意図されている<sup>44</sup>。

252. そして「数的差異は意図されない」ということがこの仕方で解される場合には

<sup>43</sup> Cf. トマス・アクィナス『「命題集」註解』第2巻第3区分第1問題第4項第3異論解答(Mandonnet, p. 98)「宇宙の本質的完全性が観取されるのは、それらの多数化が種の完全性に対して秩序づけられる諸個体においてではなくて、自体的な諸々の種においてである。それゆえ神の善性は、多数の天使が相異なる種に属するということにおいての方が、それらがただ一つの種に属するのみであるような場合よりもよりよく明瞭である」；『対異教徒大全』第2巻第93章(Pera, p. 264, n. 1799)「各々のものにおいて種の内にあるものは、種の理拠の外に存在する、個体化の原理であるものよりも尊い。したがって諸々の種の多数化は、一つの種における諸個体の多数化よりも、高貴さの点でより多く付加を行う。ところで宇宙の完全性は、諸々の分離された実体において最大限に存立している。したがって宇宙の完全性には、種に即して相異なる複数の実体があることの方が、同じ種において数に即して多数の実体があることよりも適当である」(I)。

<sup>44</sup> Cf. 本書第3巻第32区分第1問題。

[cf. 第 220 段落]、それは偽である。そして「数的差異は無限でありうる」ということがこの仕方では証明される場合には [cf. 第 220 段落]、それは帰結しない。「数的差異は無限でありうる」のであり、その無限性は意図されない。したがって、その差異は意図されない」ということは帰結しない。というのも、或る数的差異は有限でありうるし [現に] そうであり、またそれは意図されうるし [現に] 意図されているからである！

253. 最後のもの [すなわち第 222 段落] に対して私は次のように言う。哲学者 [アリストテレス] が「神的存在を救うために」生成は永続的であると言っており、これは、そこでは種が一個体では常に存続することができるわけではない可滅的なものどもにおけることであるとはいえ、しかしながら、諸々の可滅的個体において多数性は厳密には種の救いのためにある、と彼が言っているわけではない。それゆえ種の救いは、同じ種における諸個体の多数性の原因であるが、厳密な原因ではなくて、[第 251 段落で] 前述されていたような原因 [すなわち神の善性を伝達すること] である。

254. そして「一つの種にはただ一つの個別者と一つの個的物体しかない」ということが諸天体について引き合いに出されていることに対して [cf. 第 223 段落]、私は解答する。アリストテレスの論拠は次の通りであった。そのような「個別的物体」は種の質料全体から成っていた（しかも彼によれば、現実態的質料だけでなく可能態的質料 [materia potentialis] から成っていた）。なぜなら彼によれば、そうしたいかなる種においても、そうした種にあって一つの個別者において全体的な仕方であるわけではなかった可能的質料 [materia possibilis] など全くなかったからである。実際、不可動および永続的なものどもにおいては、それらがそうしたものであることに即して、つまりは不可動で永続的なものであることに即しては、何も新たに産出されえないと彼は措定した<sup>45</sup>。そして「すべての永続的物体は、その種の、現実態的および可能態的質料全体から成っている」という命題において神学者たちは彼に賛成しないのだから<sup>46</sup>、[すべての永続的物体は種において数という点で一つであるという] 結論

<sup>45</sup> Cf. ガンのヘンリクス『第 11 任意討論集』第 1 問題主文 (HGQ, f. 439 T) 「哲学者たちが措定したことには、神から直接には何も新たに作られえず、むしろ、神から直接に作られうるものは何であれ永遠から作られていた。そしてそれゆえ、そうした前件が措定されたので、哲学者たちは、仮に太陽の質料が多数化可能であったとするなら太陽の形相そのものは [中略] 複数化可能であったとしても、複数の太陽が存在しそれらは神から作られるということが可能であったと措定することはできなかった」(H)。

<sup>46</sup> Cf. ガンのヘンリクス『第 11 任意討論集』第 1 問題主文 (HGQ, ff. 438 T–439 T) 「太陽は、既に作られた、太陽の形相に対して可能的である自らの質料全体を含んでいるとはいえ、しか

において〔も〕彼に賛成するべきではない。

（ほんま・ひろゆき 東京大学大学院人文社会系研究科在学／

日本学術振興会特別研究員 DC）

（いしだ・りゅうた 日本学術振興会特別研究員 PD／

慶應義塾大学文学部訪問研究員）

※本稿は、JSPS 科研費 18J14369（本間）、18K12191 および 17J00136（石田）の助成を受けたものである。また本稿の草稿段階において、アダム・タカハシ、米本高弘の両氏より様々なコメントを頂戴した。記して感謝したい。

---

しながら、神から作られることが可能な、作られるべき質料の全体を含んでいるわけではない。そのようなわけで神は、太陽の形相に対して可能的である質料（それは、ただ太陽の形相の下にだけあるような質料のことである）を新たに作ることができるのと同様に、もし意志するとするなら、新たな太陽を作ることができる」；トマス・アクィナス『対異教徒大全』第2巻第93章（Pera, p. 265, n. 1800）「諸天体においては、それらの完全性のゆえに、一つの種には一個体しか見出されない。なぜなら、それらの各々は自分の種の質料全体から成っているからである〔後略〕」（H）。